



Title	媒介される知恵：実践的研究とは？
Author(s)	菅，磨志保
Citation	Communication-Design. 2007, 0, p. 49-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12335
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



6. 媒介される智恵——実践的研究とは？ 菅磨志保

大学は「個人商店が集まったようなところだ」と言う人もいるが、とすればCSCDは「仮設の商店街」に例えられるかもしれない。大学内に新しい部局として創設されたCSCDは、一定期間内に、商店街全体としての成果を出すことが求められており、参加店は個人の商売と平行して全体への貢献も求められる。もちろん個々の店が良い商品を提供し続けなければ商店街全体の停滞につながる。

以下では、この商店街の一仮設店舗である私が、これまで何を考え、通過点となるここで何をしたいこうと考えているのかを述べてみたいと思う。

阪神・淡路大震災から市民活動研究へ

これまで社会学の立場から、災害（減災）とボランティア（市民活動・NPO）という研究テーマに取り組んできた。センターでは主に「減災コミュニケーションデザイン・プロジェクト」に関わっている。このテーマを扱っている研究者は少ない。テーマが特殊過ぎて研究結果を普遍化し難く、研究として発展性があるのか、と言われたこともあるが、私自身は、このテーマの奥の深さを感じてきた。

きっかけは12年前に発生した阪神・淡路大震災だった。被災した祖母の家を手伝いに行くという私的な理由で被災地に入ったが、見慣れた街の変わり果てた姿に、納得できず、憤りを感じた。そんな中、災害救援に駆けつけた大勢のボランティアの姿が力強く映った。

ボランティアする／されることを大量に経験していた被災地には不思議な連帯感があった。私自身は被災者でなく、災害ボランティアでもなく、当時はまだ研究者でもなかったが、それぞれの感覚を肌で感じながら、こうした活動が、災害という特殊な事情を超えて、何か日本社会の底流につながっているように感じていた。3月後半に入ると、市民による救援活動も収束に向かい、徐々に消えていった。私は、社会学の立場から、これらを記録し後世に残していく必要性を強く感じていたが、災害対応に忙殺されている現場の人達にとって、現在の活動に直接役に立たない記録という作業に時間を費やすのは惜しいだろう。時間があて、また距離をおいて考えられる私ができる「ボランティア」かもしれない。そうした思いから、多様な市民によって展開された災害救援活動と、その後の復興支援活動の軌跡を調査すべく、私の神戸通いが始まった。

神戸を訪れる度、街の再建は進み、外観は変貌していたが、他方で、被災者が抱える問題が潜在化しつつ深刻化している現実も伝わってきた。印象的だったのは、こうした問題の裏には必ずといって良いほど、それらの問題に取り組む市民の活動があったことである。多くの人々のボランティア体験は、地縁や社縁とは異なる人間関係の新しい回路を生み出したのではないかと。そしてそうした新たな関係を通じて、新たな課題に対応する仕組みが創られてきたように思う。例えば、コレクティブハウジングや超高齢社会下のコミュニティづくりなど住まいと暮らしに関わる新たな提案、分野を超えたNPOのネットワーク、コミュニティビジネスなど。

…災害（減災）

…ボランティア
（市民活動・NPO）

…減災コミュニケーション
デザイン・プロジェクト

…災害ボランティア

…NPOのネットワーク

…コミュニティビジネス

こうした被災現場の活動実践から生まれた提案や仕組みは、災害という局面を超えて、日本社会が現在抱えている課題への処方箋としても示唆に富む内容になっているように思う。

フィールドワーク…

エスノグラフィー…

市民活動研究…

こうした「市民による自発的な活動」を把握（調査）するに当たっては、フィールドワークを通じて事実関係を整理し、記述を重ねていく（エスノグラフィーの構築）という手法を採ってきた。客観性に欠ける、生産性が低いという指摘もあるが、市民活動という統一的指揮下がない、捉え難い活動を説明する上で適した手法だと思う。また、従来の市民活動研究では、「ボランティアズム」「対抗性」といった思想的・理念的な観点から対象を切り取って論じるものが多く、その姿勢で見ると、現場で創られつつある新しい現実が汲み取りにくい。そこで活動の実態と仕組みを詳細に記述し、記録としての価値を浮かび上がらせつつ、そこに新しい一現場の感覚にも近い一解釈を求めていくという手法を選んだ。

震災から7年目、一連の研究を著書にまとめ新しい解釈を提示した。阪神大震災という事例の分析であり、ここで生まれた新しい動きを即、普遍化することはできないかもしれない。しかし今の社会に応用できる知見は沢山あり、さらにこの研究を続けたいと思うようになった。

災害研究…

実践的研究とは？ ―災害研究

共同研究…

研究・活動実践の共有…

2002年に、神戸に新設された防災機関「人と防災未来センター」に着任した。ここで存分にフィールドワークができると思ったが、新設の公的機関での研究体制づくり、他の分野の研究者との共同研究という課題が待っていた。最初は、意志疎通もままならなかったが、災害現場で、研究・活動実践を共有する中から、視点・思考回路・研究方法論の違いを超えた協働が生まれていったように思う。また、そうした共同研究を通じて、それまで経験したことのない知的刺激も沢山受けた。

例えば、避難という課題が与えられた場合、工学研究者は「避難情報が発信されたら人は時速〇Kmで逃げる」という行動予測モデルをつくり、情報発信時間と犠牲者（避難行動が終わらない人）の関係を明らかにすることで課題解決の処方箋を書こうとする。しかし現実の社会では、人は避難情報だけでは逃げない。「信頼できる隣人の声かけで、避難率が上がる」という調査結果があるが、これを物理的な行動予測モデルに乗せることは難しい。当初は、工学研究者が提示する、人間を物理的な側面

からのみ捉えた行動予測モデルに違和感を覚えたが、一緒に研究していく中で「命を救う」という局面では、人間という物体が、物理的世界の中で他の構造物・流体からどんなダメージを受けるのかを解明することが必要になる、という当たり前のことを改めて認識させられた。と同時に、自分の研究は「命が助かった後」の世界——被災社会の中で人は何に規定され、どんな仕組み・役割で動くのか——しか見てこなかったことにも気づかされた。

専門分野が異なる研究者の視点・研究手法を知ることで、自分がそれまで無自覚に前提としてきた視点や考え方が相対化されたり、また他の分野の力を借りることで、ある防災課題に対して総合的な解決策を検討できることを、この研究機関で学んだように思う。

…視点や考え方の相対化

…総合的な解決策

研究手法に対する考え方も、少し変わった。それまでフィールドワークに基づく記述研究に固執していたが、この手法では成果を出すまでに非常に時間がかかる上、研究成果も分厚い記述になり、読む側にも時間と労力を要求する。それでも私は、研究成果をどう活用するかは実践者に任せ、研究者はそこにあまり介入すべきでないと考えていた。他方、工学的な研究では、研究結果を分かり易く提示したり、課題解決に向けた処方箋を書くことに積極的な研究が多い。自然科学の実験のように、社会現象はコントロールできないが、自分の研究をどう社会につなげていくかを考える姿勢に学ぶところは多かったように思う。

社会学の研究としては、現象を抽象化・普遍化して新たな視点や枠組みを提示していく研究の方が評価されるかもしれない。しかし現在は、フィールドで固有名詞を持った対象と接する中で見えてきた個別具体的な課題に取り組むこと、さらにそうした課題を異なる視点・分析手法を持った仲間と共に研究していく面白さを追求していきたいと考えている。

生産した「知」を対象に合わせて発信する

社会学連携という看板を掲げる CSCD は、こうした志向を持った研究を進めやすい「場」であるように感じる。

現在、私自身も幾つかの実践団体（NPO）の正会員・スタッフとして活動しているが、被災地でフィールドワークをしていると、具体的な問題へのコミットを求められることがある。こうした個別具体的な課題に対して、研究とは異なる次元で関わっていくことも、社会学連携のひとつの機能

なのかもしれない。

中越地震では、被災後間もない現場から、具体的なノウハウの提供が求められた。大規模避難所の運営という課題に直面した知人から「これから事態はどう展開していくのか。神戸の時、避難所がどう推移していったのかが分かる資料が欲しい」とか「倒壊家屋から家財を引き出す活動が求められているが、危険度をどう判断したらよいか。また家に入る場合どんなリスクに備えておく必要がるか」など。

学術論文…

そんな問いに対しては、まとめられた学術論文よりも、むしろ、論文を書くプロセスで作成してきたフィールドノートなど、あまり加工していない記録や現場で収集してきた団体の活動報告の方が役に立つように思う。

記録…

活動報告…

資料を受け取った避難所のリーダーは、自分の直面している現場の事情に合わせて、神戸の記録を読み込んでいた。倒壊家屋の危険対策については、私自身も現場に入り、関係者と一緒に、危険度を踏まえた活動フロー図を作成した。完全なリスクアセスメントは行えなかったが、現場に関わる人達が一同に会して合意を形成していった。むしろそのプロセスを作れたことの方が重要だったように思う。こうした「協働の活動プロセス」の重要性については、研究者として学術的に考察を深めていくという課題もあるが、フィールドワークの過程で得られた「旬な」知見を、次の現場に活かせる形で伝えていくことも、自分の役割ではないかと感じている。

協働の活動プロセス…

また、恒常的な課題として、減災を担う人材の育成が挙げられる。すでに、被災現場での活動ノウハウについては、関係者の間でも意識的に共有・蓄積がなされ、幾つかのガイドブック——活動時の安全・衛生確保、円滑な活動を可能にする体制づくり（水害・災害ボランティアセンター）など——が出されてきた。ただ、平常時にこうしたノウハウを持つ人材を育成する取り組みは進んでいない。

そもそも、災害を体験したことが無い人に、緊迫して混乱した被災現場の中での活動をイメージしてもらうことは難しい。しかも災害ボランティアは、公的機関が法律に基づいて行う定型的な支援では救いきれない潜在化している問題を発掘し、対応していくという役割が期待される。それは個々の活動者の経験知・暗黙知・勘・センスといった、標準化しにくい＝伝えにくいスキルに依存した活動でもある。こうした活動を平常時に伝えていくためには、伝える側も相当努力し、工夫していかなければならない。

経験知・暗黙知・勘・センス…

私自身は、実践者が培ってきた経験や勘を持ってはいない。しかしフィールドを共にしてきた実践者が、現場で得てきた「智恵」を引き出し、災害を経験したことのない人にも伝えられるような形に加工していく——例えば、災害現場を疑似的に体験してもらえるような場を設定したワークショップ・プログラムの開発など——お手伝いは出来る。お手伝いではなく、むしろこのように実践者と連携して教育・研究開発をしていくこと自体、社学連携をミッションとするCSCDの重要なテーマになるだろう。さらに実践者と連携し、活動実践で得られた知の発信の仕方とも考えてみたい。これもある種の「媒介」「変換」機能と言えるかもしれない。

…智恵

こうした一連の研究・実践を進めていくプロセスの中で新たな関係性・実態が生みだされていく。そんな現実をCSCDという「場」を通じて展開させていきたい。